

## 通信教育部と信窓会

中央大学の通信教育部は、一九四八（昭和二十三）年十月に法学部が設置され、翌年四月の新制大学設立とともに法学部付設の通信教育課程と改められた。このため、当初予定されていた経済学部<sup>1</sup>の設置は見送られている。

敗戦後の社会的混乱が未だ続いてきた時期にあって、通信教育課程の開設は、人々の向学心を満たす時宜を得た試みであった。開講初年度には、四、五〇〇人も入学者を数えている。

のちに、多くの卒業生が「昭和二十四年二月のある日、ふと見た朝日新聞の学生募集欄ではじめて大学通信教育の制度があることを知った私は何らためらうことなく、直ちに入学案内を請求した」等と回顧しているように、発足以来、入学者募集に効果があったのは新聞広告であったようである。

ところで、通信教育課程のカリキュラムには、独学的傾向を克服するため、六週間の「面接授業（スクーリン

グ）」が必修とされている。しかし、この面接授業は、「ためらいなく」入学した人々にとつて、大きな関門となった。初年度を例にとれば、面接授業参加者は、入学者の三割に満たない一、二〇〇人にすぎない。

また、受講生の宿舍は、学内の教室を府県別に割り当て、のちに畳敷きになったとはいえ、当初は机を並べてゴザを敷き簡易ベッドとしたような施設であった。学生たちは、そこで深夜まで教材と格闘し、あるいは友と語り合ったのである。

このように劣悪な勉学環境を少しでも改善し、通信教育部卒業生の結束を深めることを目的として同窓会組織「信窓会」が結成された。信窓会は、五三年三月二十六日に第一回卒業生八八人が誕生した際、阿部文二郎<sup>2</sup>通信教育部長を名誉会長として発足した。事務局は通信教育部内に置かれ、「会員相互の親睦を図り、中央大学通信教育部の興隆に寄与」する活動を開始したのである。

その後、五八年に坂本六合魁（第二回卒業生）が信窓会初代会長に就任、六三年二月十五日には学員会支部として承認された。この年は、通信教育部設置十五周年・信窓会結成十周年にあたっていたため、これを機に、機関誌の発行が企画された。その結果、同年十月には、名誉会長守屋善輝の題字を表紙とし、学員会長大川博・学長升本喜兵衛ほかの祝辞や卒業生の「学窓回顧」・規約・支部だより等を載せた五六頁に及ぶ『白門信窓』創刊号が発行された。

しかし、順調にみえた信窓会の活動は、六七年頃から全国の大学に広がった大学紛争の影響もあり、混乱期を迎える。六六年から二年二回発行されていた『白門信



『白門信窓』創刊号

窓会報」は第一〇号以降発行が中断し、定期総会も七二年以来開催されなかつた。信窓会

を知らない卒業生も増え、活動休止状態になる支部もみられた。

こうして信窓会の機能が停止し、一万人を超える通信教育部出身の学員の協力と連携が不可能になった。同時に、在学生による学生会支部の活動も年々低調の一途をたどり、八一年頃には、支部長不在の支部が二六、活動休止が九支部にもものぼっていた。

こうした状況に危機感をつのらせていた関東近県の地方支部を中心として、八一年十月に臨時総会が召集された。ここでは、役員の選出、事業計画等を決議し、再建への第一歩をしるした。新事業計画は、研究会・講演会・親睦会の開催、名簿作成、会報発行のほか、特に「長期にわたる空白状態の回復と本会を軌道に乗せるために必要な事業」を行うことをうたっていた。これを受け、翌年一月には「再建号」と付記された『白門信窓会報』第一号が発行され、臨時総会の経緯等が会員に報じられた。そして、同号において、真田芳憲<sup>3</sup>通信教育部長は、「信窓会の再建は、わが通信教育部総体として完全な正常化を迎えたことを象徴するものであり、通信教育部の歴史にあって画期的な出来事」との言葉を寄せたのである。